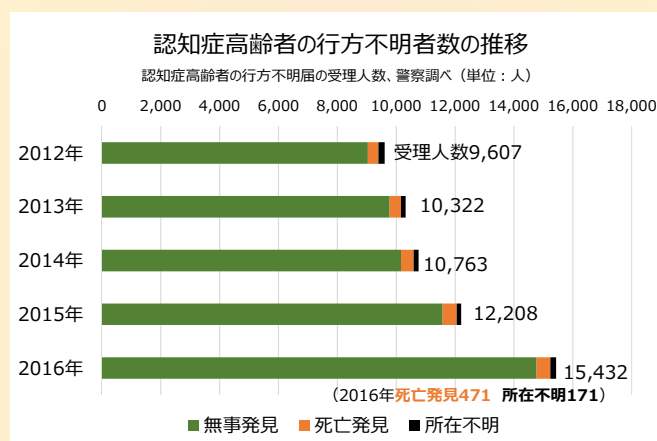


平成30年度 認知症介護研究・研修東京センター 研究成果報告会
認知症ケアセミナー

行方不明を防ぎ、 安心して一人歩きを楽しめる町に

認知症介護研究・研修東京センター
研究企画主幹 佐々木 幸

認知症高齢者の行方不明の現状は？



この数字は

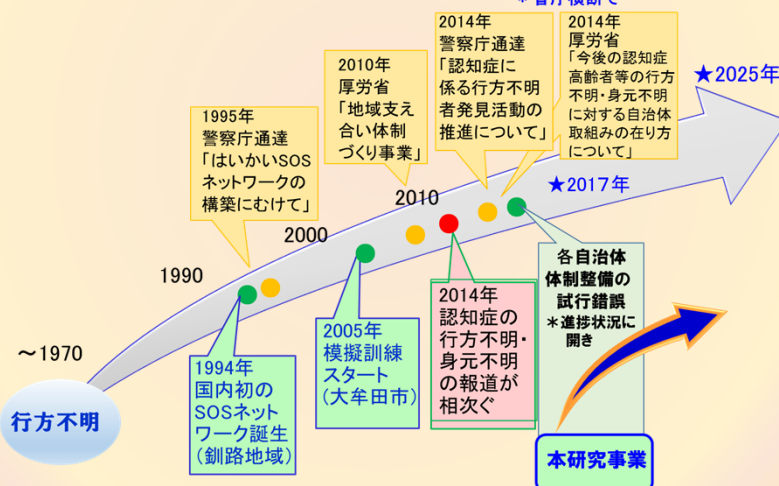
- 「行方不明の届出があり」「警察に受理された数」
- 65歳以上の人数であり、65歳未満の人（若年性認知症の人）は含まれていない。

認知症の人の行方不明は「古くて新しい課題」

○認知症の人の行方不明は、1970年頃から社会問題化した「**古くからの課題**」。
○一方、少子高齢化やライフスタイルの変化に伴い、行方不明の発生状況やアプローチの仕方も変化。常に「**新しい課題**」を含んでいる。

2015年認知症施策推進総合戦略

* 省庁横断で



認知症は「私の課題」

○2025(平成37)年には5人に1人が認知症になるという推計も。
誰がなってもおかしくない、当たり前の病気。

図1-2-3-2 65歳以上の認知症患者の推定者と推定有病率



私たちが目指す地域の姿は

- 私が認知症になった時、どんな暮らしをしたい？

↓
行方不明にならず、安心して外出できること
安心して暮らせる地域であること

- 全国各地で様々な試行錯誤が積み上げられて、年々充実している。
○しかし、それらの全体像は見えにくく、
取り組みの工夫や成果が共有されず、活かしあえていない。

全国どこでも、行方不明を防ぎ、安心して外出できる地域を作ること

- すべての自治体の実効性の高い体制作りを年々積み上げ。
○私たちの町を、認知症になっても安心して外出できる町に。

平成29年度厚生労働省老人保健健康増進等事業 認知症の人の行方不明や事故等の未然防止のための 見守り体制構築に関する調査研究事業

・ 研究の目的

すべての自治体において行方不明を防ぐ見守り・SOS体制（以下、体制とする）構築が速やかに進み、認知症があっても安心・安全に外出を楽しみながら暮らせる地域社会の構築を促進する

見守り体制…普段認知症の人が外出する時、地域の人がさり気なく見守ったり、困っているときに声をかけてくれる体制

SOS体制…認知症の人が行方不明になった時、発見・保護のために行政・専門職や地域の人や専門職が迅速に動ける体制

・ 見守り・SOS体制構築のための基本指針

検討委員会・ワーキングにおいて以下の5点が提示された

- ①本人視点で目的を大切に
- ②普段からの見守り体制を重視しSOS体制との一体的構築（全体性と連動性）
- ③行政のイニシアティブと多様な地域資源による自発的活動の促進
- ④スモールステップで活動の連鎖を
- ⑤先行地域の実践策の共有・応用

・ 研究の概要

1. 基本パッケージの検討・開発

体制構築の基本的な指針・全体構造・方策等を総合的に検討し、一体的に形成。普及・活用のガイドを作成

2. 都道府県・市区町村全国調査

自治体の体制等の現状、工夫、課題、好事例を把握

3. パイロット調査の実施

体制構築を進めようとしている2地域（静岡県湖西市、福岡県京都郡みやこ町）で基本パッケージを参考に体制構築に着手。そのプロセス、成果、課題等を調査。基本パッケージ活用可能性、有効性を検証。今後、自治体が体制構築に円滑に着手し継続発展させていくための具体的な知見を整理・提示した

4. 体制構築に資するデータベースの検討

調査研究事業の詳細は、認知症介護情報ネットワーク（DCnet）〔<https://www.dcn.net.jp/>〕をご覧ください。

基本パッケージの検討

検討委員会・ワークショップでの検討

体制作りが年々進んでいる地域にみられる特徴

1. 本人視点・実効性

日々、切に暮らす本人の視点で、役に立つ活きた体制をつくる

2. 共創と協働

行政と地域の多様な人が方向性と力を合わせて、一緒につくりだす

3. 全体性と連動性

取組の全体像に視野を広げ、関連する取組と連動させながら

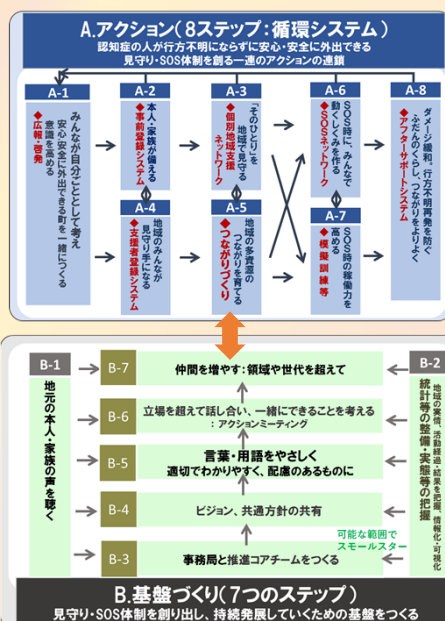
4. 小さく始めて、息長く育てる

できることから、即動き、持続発展を

5. よそをみて、よそとつながり、互いに活かし合う

他地域との交流、相互に発展

基本パッケージの検討



先行地域で体制作りを進める関係者で
ワークショップを構成
→体制作りに必要な取組と
全体像を示す

基本パッケージ

体制整備の基本的指針や必要な取組
をワンセットにしたもの

認知症の人が安心して外出できる
見守り・SOS体制を**作り出す**
7つのステップ

「**B. 基盤づくり**」

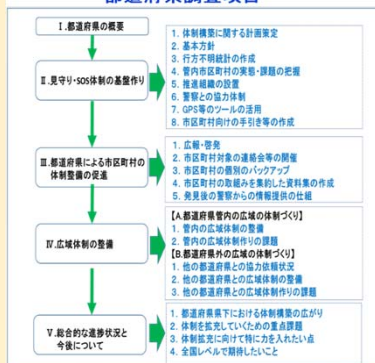
を**土台**とした
日頃の見守りやSOS発生時に
実効性ある動きができる
8つのステップ

「**A. アクション**」

全国調査

- 1) 対象
全都道府県 (47)、全市区町村 (1,741)
- 2) 調査内容
見守り・SOS体制構築の全体的実施状況、成果、課題等に関する設問を基本パッケージの構造をもとに設定。

都道府県調査項目



市区町村調査項目

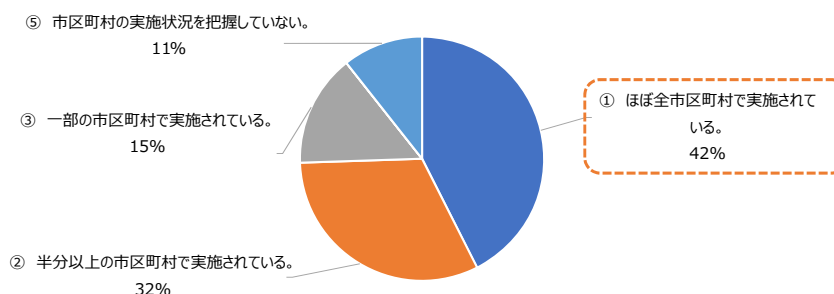


- 3) 調査期間
平成29年11月28日～12月26日
- 4) 回収数・回収率
都道府県調査 回答数及び有効回答数47（回収率100%）
市区町村調査 回答数1,091 有効回答数1,083（回収率62.2%）

都道府県調査結果からみた主な論点

論点1. 都道府県によって、管内市区町村の体制整備の進捗状況に開きがみられる。
⇒市区町村の実情をとらえて、計画的・継続的な促進とフォローアップが必要

【V-1】管内市区町村における見守り体制・SOS体制の
一体的構築の実施状況 (n=47)



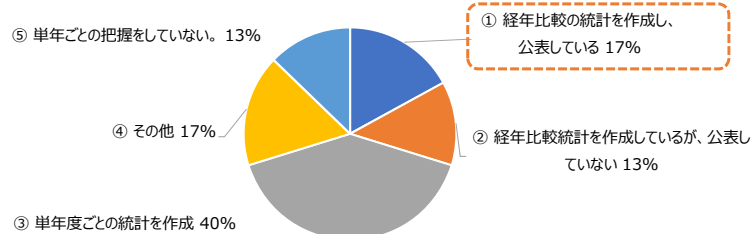
【Ⅱ-4】管内市区町村の体制構築の実態・課題の把握・活用状況 (n=47)

- ① 調査票、聞き取り等で具体的に把握し、活かしている 9 (19.1%)
- ② 調査票で把握し、活かしている 11 (23.4%)
- ③ 調査票で把握しているが、活かすまではしていない 22 (46.8%)
- ④ その他 4 (8.5%)
- ⑤ 市区町村の体制構築の実態・課題を把握していない 1 (2.1%)

都道府県調査結果からみた主な論点

論点2. 都道府県の立場を活かした取組を通じて、 市町村の体制構築を促進することが必要

【Ⅱ-3-1】行方不明発生件数の統計作成 (n=47)



【Ⅲ-5】行方不明者の発見後に、情報が警察から行政に提供される仕組

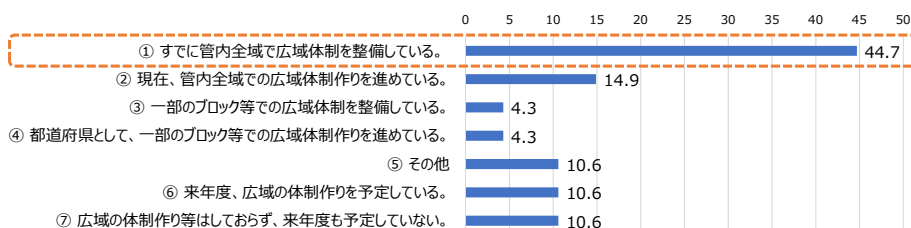
① 仕組がすでにある	9 (19.1%)
② ③今年度以降に予定	4 (8.5 %)
③ 予定なし	34 (72.3%)

発見後に警察から行政に情報が提供される仕組が整備された都道府県では、調査結果から多様な成果（行政がしることができなかったケースの把握、保護後の支援、再発防止、普段からの警察と行政の連携が図りやすくなる等）が確認されている。

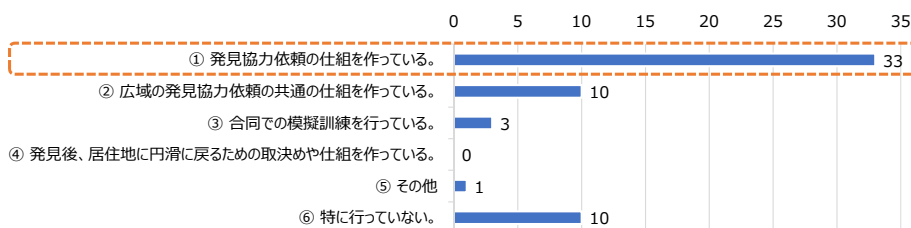
都道府県調査結果からみた主な論点

論点3. 都道府県として、管内そして他都道府県との広域の体制づくりの強化を

【Ⅳ-A-1】都道府県管内市区町村の広域の体制整備状況 (単位: %, n=47)



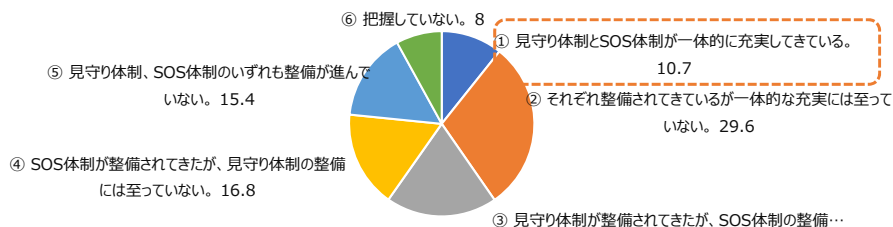
【Ⅳ-B-4】他の都道府県と協働した広域での発見体制作り (複数回答 単位: 都道府県数 n=47)



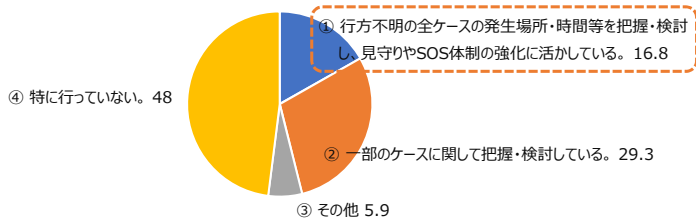
市区町村調査結果からみた主な論点

論点 1. 市区町村によって、管内の体制整備の拡充状況に開きがみられる。
⇒管内地域の実情をとらえて、計画的・継続的な促進とフォローアップが必要

【Ⅴ-1】市区町村内の見守り・SOS体制の拡充状況 (n=1,075 単位%)



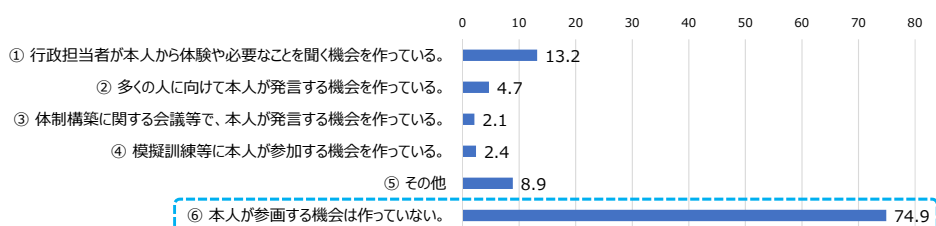
【Ⅱ-4】行方不明の発生に関する実態の把握・検討 (n=1,079 単位%)



市区町村調査結果からみた主な論点

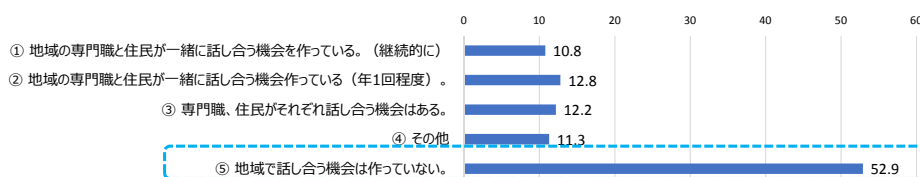
論点 2. 市区町村が、体制構築を本人視点や本人参画を重視しながら進めていく方針を掲げ、実際の実践の中で波及させていくことが必要

【Ⅱ-2】体制構築に本人が参画する機会 (複数回答、単位%、n=1,083)



論点 3. 体制整備を、年々、継続的に拡充していくための組織、話し合いの強化を

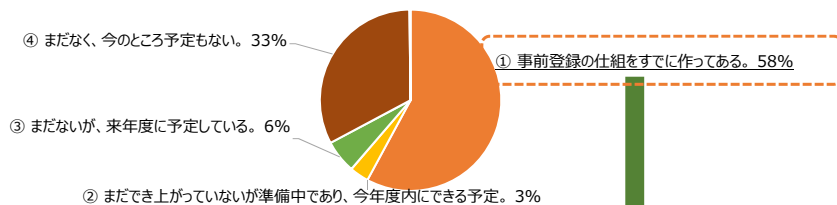
【Ⅱ-6】体制作りのための地域での話し合い (単位%、n=1,083)



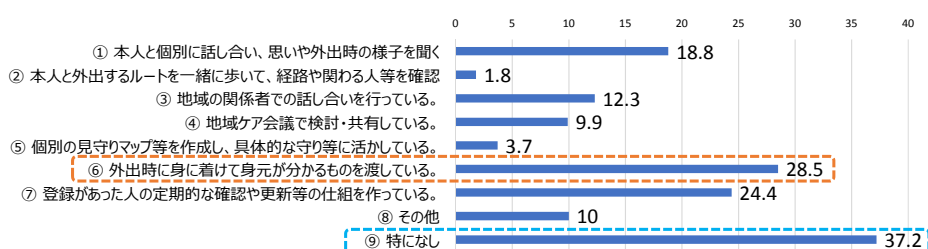
市区町村調査結果からみた主な論点

論点4. 行方不明の心配がある人の個別支援ネットワークの強化

【市区町村調査】Ⅲ-2.行方不明の心配がある人の事前登録の仕組（単位% n=1,081）



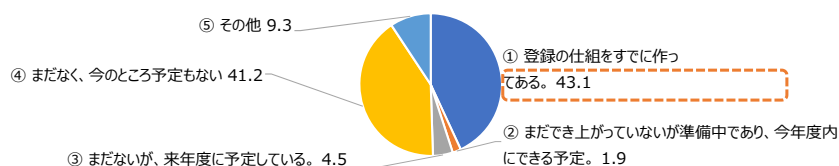
【Ⅲ-2-◆3】登録後の本人とのかかわり（複数回答 単位% n=627）



市区町村調査結果からみた主な論点

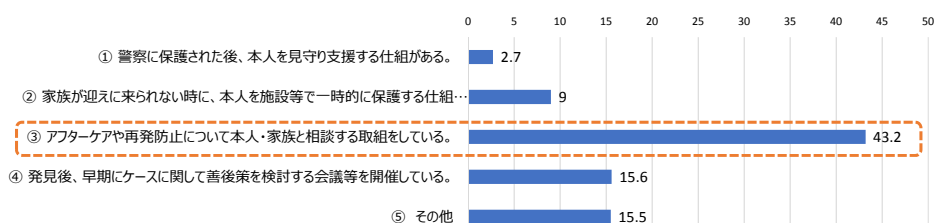
論点5. 地域の多様な人が共に見守り、いざという時に稼働する仕組づくり

【Ⅲ-4】協力者・機関を登録する仕組（単位% n=1,081）

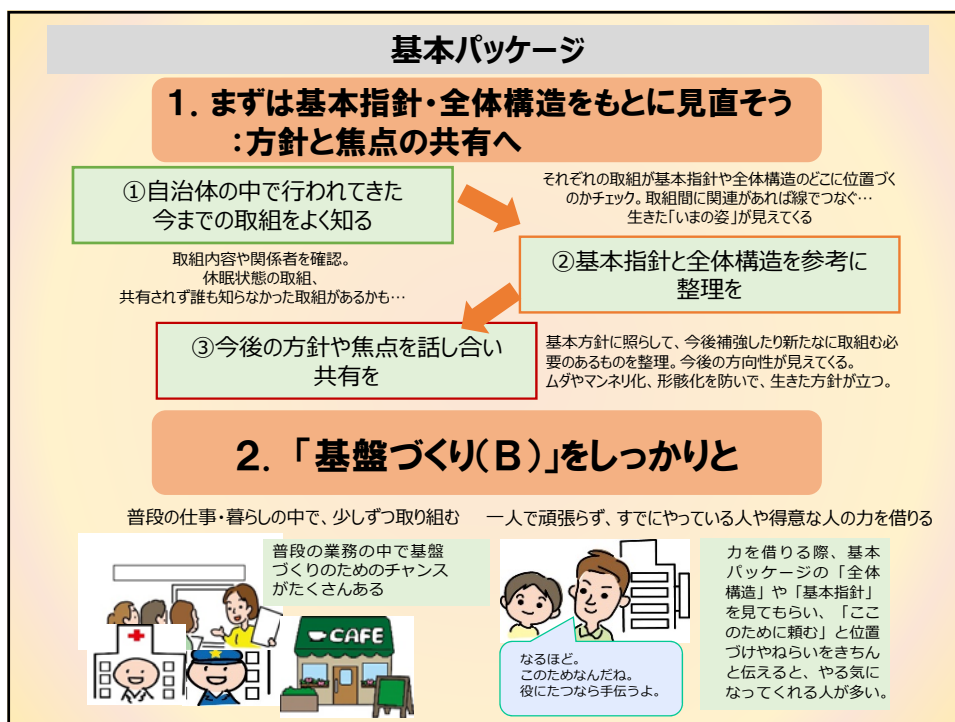
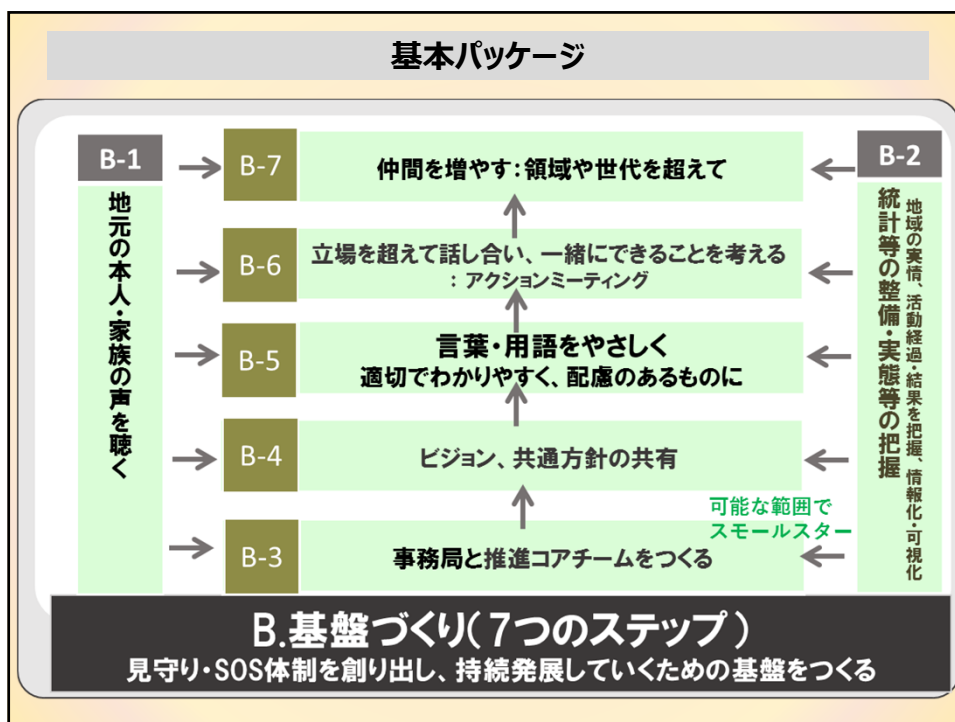


論点6. 発見・保護されたあとに本人・家族をアフターケア・支援する仕組づくり

【Ⅲ-7】保護された後に本人・家族を支援する仕組（複数回答 n=1,083）



論点7. 広域の体制作りの必要性



基本パッケージ

B1. 地元の本人・家族の声を聴く

本人と家族に実際に会い、生の声を聴く

- ◆日々暮らしていく上での「見守り・SOS体制づくり」の重要性、先送りにはできないことを、リアルに実感できる。
- ◆取り組む目的や方針を、一般論・抽象論ではなく**地元の現実に根差して考えられる。**
- ◆やるべきことの優先課題や内容を、具体的に知ることができる。
- ◆関係者や地域の人たちへの呼びかけを、**自分の言葉で、説得力をもって伝えられる。**
- ◆**実効性の高い体制づくりを進めていける。**
- ◆**本人・家族が取組の大事な一員となる。**



体制づくりを、本人・家族の視点で考えていく、本人・家族抜きに進めない、という方針を自らの態度で示していきましょう。

①声を聴ける場、人を探してみる

- ・役所など本人・家族が来所する場合
- ・本人・家族が集っている場
- ・本人・家族が普段過ごしている場
- ・医療や介護サービスの場 など

②一人からでもじっくり聴く機会をつくる

- ・自分の立場や話を聴かせてもらうねらいをわかりやすく伝える。
- ・「ありのまま」の話をよく聞く
- ・困りごとや問題だけでなく、楽しみや希望について聴くことで、手がかりがみえる。

- ・家族と本人をひとくくりしない
- ・認知症でも「話を聞かせてもらいたい」というと話せる人がたくさんいる
- ・一対一だと話しにくい、同じ立場の人どうしだと話しやすい「本人ミーティング」も有効

③時々（定期的に）話を聴く機会をもつ

基本パッケージ

B2. 統計の整備・実態の把握と共有

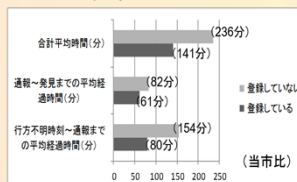
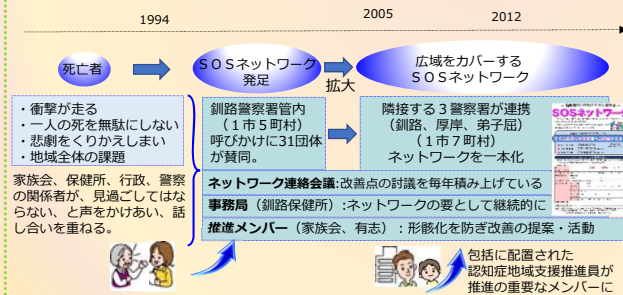
- 1) 警察の担当者と関係を築き情報共有する
- 2) 行方不明発生に関する地域情報の集約
- 3) 実態把握・整理
- 4) データ等をわかりやすくまとめ共有を

	H27年度	H28年度
認知症等と思われる行方不明者	11件	19件
SOSネットワーク登録者	3件	7件
警察への通報数	7件	17件
かとう安心ネット	4件	2件
死亡発見	1件	0件

(兵庫県加東市)

B3. 事務局とコアチームをつくる

- スタートは一人の死亡者。「命を守ろう」「本人と家族と一緒に支えよう」という人たちが結集
- 事務局、推進メンバーが、原点を語り継ぎながら、活きたネットワークをつくる



(北海道鉦路地域)

基本パッケージ

B4. ビジョンと共通方針の共有

【ビジョンが共有されることで】

- ◆ 立場や職種を超えて、「こういう地域と一緒にめざそう」という**結集軸**ができる。**仲間**が増える。
- ◆ 見守り・SOS体制づくりの様々な**取組は、ビジョンにむけた手段**であり、やっておしまいにならないこと、ビジョンに向けた**継続的な取組の必要性を（再）確認**しやすくなる。
- ◆ 計画立案、見直し・評価のための基になる。
- ◆ 形骸化、マンネリ化を防ぎ、実効性のある体制をつくっていくことにつながる。

【共通方針が共有されることで】

- ◆ 様々な**関係者が、方針の違いによって消耗したり、取組が進まなくなることを防げる。**
- ◆ 様々な取組を共通の方針で着実に進めていくことができ、**体制づくり全体がスピードアップする。**

B5. 言葉・用語の見直しと配慮

配慮のある言葉は

- 地域の人たちの認知症の人に関する**理解が深まり、普段からの支援や体制づくりの進展・加速化**につながります。
- 本人・家族らに**安心**をもたらし、地域や行政への**信頼感**を高めたり、（早期の）支援につながるきっかけになります。

本人、家族からみてどうか。

不安を煽られる、傷つけられる、嫌な思いをする表現はないか

地域の関係者からみてどうか。

- 認知症の人を問題視したり、画一的にみなしてしまう表現、なりたくない、他人事とみなしてしまう表現がないか。
- 行政に活用される、負担が増えると感じてしまうような表現がないか。
- ・医学用語や国の用語、警察用語をそのまま使ってしまうっていいか。
- 難しくわかりにくい、馴染みにくいのか。

基本パッケージ

B6. アクションミーティング

多様な立場の人たちが集まって率直に話し合い、
一緒にできることを見つけて速やかに活動につなげていくことがねらい。

同じ自治体・地域にいても出会って
いなかった多様な立場の人たちが、
アクションミーティングを通じて
出会い、顔なじみに。

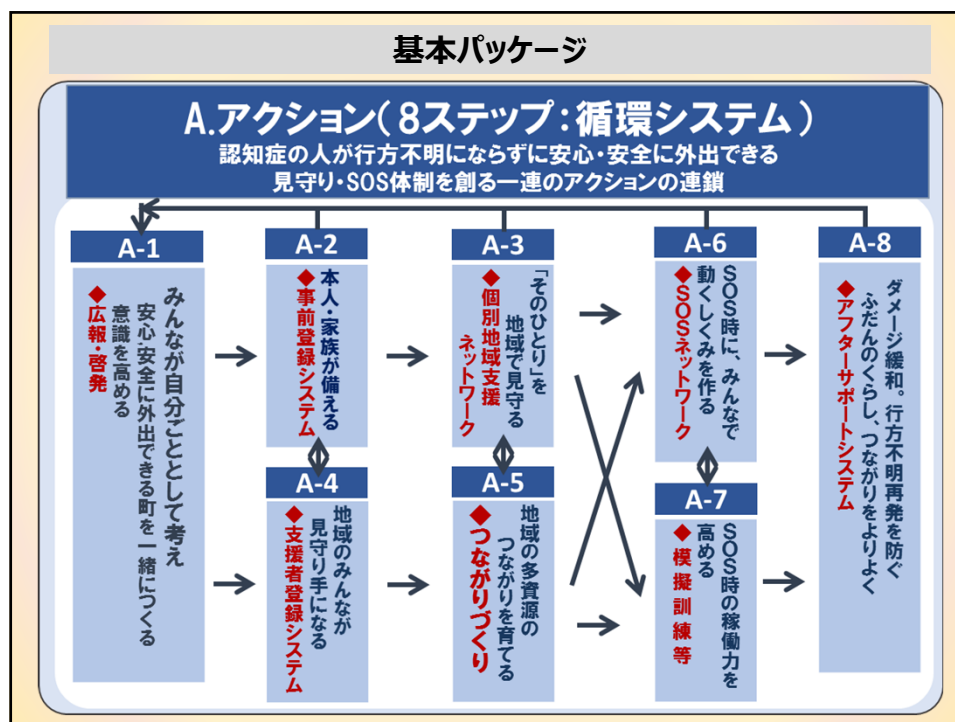
体制づくり全体が効率的に
進むための原動力
（エンジン）

立場を超えて、安心して暮らせる地域
を一緒に目指し、力を合わせて取り組
んでいく仲間が増える。

B7. 仲間を増やす：領域や世代を超えて

「行方不明を防ぐ」ことだけに特化しない日頃からの仲間を増やし、日常的な関係を築いていくことが、
ゆるやかで自然体の見守りや、いざという時に親身に探ず動きにつながります。
いつものメンバーや関係者以外の、領域を超えた新たな仲間・つながりが、**新しい解決力**を生み出します。

- 1) 視野を広げて、わがまちを見つめなおそう
- 2) 自分が壁を作らず声をかける、会いに行く
- 3) 「ちょっと一緒に」楽しい体験の共有を

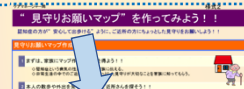


基本パッケージ

A3. 個別支援ネットワーク 「その一人」を地域で支え合う

事前登録を行った一人ひとりについて、普段から地域で見守る体制や方策を、本人・家族とともに関係者で検討し、それらの強化を着実に図る。いざという場合に備えて、「その一人」の連絡や探す体制、探し方等を予め検討し強化を図る。

- ① その人がもつ地域のつながりの把握・見える化
- ② 個別支援ネットワークを作る
- ③ 個別支援ネットワークを育てる、手入れする



(静岡県富士宮市)

「見守りお願いマップ」を作ってみよう！！
認知症の方が「安心して出歩ける」ように、ご近所の方にちょっとした見守りをお願いしよう！！



一人ひとりが、その人ならではの地域とのつながり（自己資源）を想像以上に豊富に有しています。ぜひ本人と一緒に歩いて、その人の世界、つながりを実感してみましょう。

A4. 支援者登録システム 地域みんなが見守り手になる

普段から本人をゆるやかに見守り、いざという時に、可能な範囲で一緒に探してくれる多様な立場の見守り手を着実に増やしていくために、協力を呼びかけ登録してもらう仕組み。

「何か関わりたい、役に立ちたい」と思っている、きっかけがないために活躍しきれていない人たちが地域に多数潜在しています。領域や世代にとらわれず、多様な人たちをリスタートアップして呼びかけてみましょう。



(岩手県矢巾町)
犬の散歩をしながら気になる人がいたらやさしく声をかける「わんわんパトロール隊」を結成。入隊要件は、犬が好き、認知症サポーター養成講座を受講するだけ。



左 (新潟県燕市)
おかえりサポーター

右 (山形県金山町)
高齢者あんしん応援隊



基本パッケージ

A5. 地域支援ネットワーク 地域の多資源のつながりを育てる

ネットワークに参加（登録）している多様な立場・職種の人たちが、普段から知り合い、つながりあう機会を意図的に作ることで、日常の見守りや地域での支え合いが活発になり、いざという時の機動力も向上。

ネットワーク会議、交流会、勉強会、報告会、広報やメーリングリスト…

(東京都目黒区)
「目黒区高齢者見守りネットワーク（めぐネット）」の活動通信。



A6. SOSネットワーク SOS時にみんなで動く

認知症の人等の行方不明が発覚した時（SOS時）に行方不明者（本人）を一刻も早く見つけるために関係者が協働して動くネットワークを予め形成しておき、いざという時に一緒に迅速に動いて早期発見に取り組む。



(京都府)
市町村の認知症担当や警察、保健所の職員らがSOSネットワークについて継続的に討議

基本パッケージ

A7. 模擬訓練

備えて機動力を高める

見守り・SOSネットワークの構成員や地域の人たちが、実際の行方不明発生時に上手く動けるように、実際に想定した場面を作り、模擬的に動いてみる体験をする訓練を行う。

- ① 家族等が本人の行方不明に気づいた後の警察への通報の仕方
- ② 警察が通報を受けた後のネットワーク
- ③ 構成員への協力依頼の流れや方法
- ④ 構成員等の探索や発見時の声かけの方法
- ⑤ 発見後から探索本部までの流れや方法



(新潟県湯沢町)
毎年一つの小地域に焦点を絞り、地域の人主体の訓練企画を立てながら、地元で即役立つ訓練を実施

(大阪府高槻市)
認知症地域支援推進員と認知症介護指導者が、小学校での声掛け訓練を企画



訓練後に振り返りを行うことが大切。

A8. アフターサポートシステム

本人・家族のダメージ緩和と再発防止

行方不明という体験が本人や家族、地域の人たちに与えるダメージは大きく、本人・家族の孤立が深まる、行方不明を繰り返すこともある。それらを食い止めるために、保護直後の本人・家族らとつながりをつくり、ダメージの緩和や行方不明の再発防止など、必要な支援（アフターサポート）を行うことが非常に重要。

- ① 警察の担当者と話し合い連携を強化
行方不明を繰り返している人や保護後が気がかりな人の存在や状況、課題について情報や意見交換をし、互いの連携を強める。
- ② 保護後の「一人」からフォローを丁寧に
地域の関係者と、行方不明保護後の人の存在や状況について話し合ってみよう。
何らかの支援が必要と考えられる人や、現状が未把握な人と直接・間接的につながる工夫をし、見守りやSOS時の備えを検討しよう。

パイロット調査（体制づくりを始める2自治体のアクションミーティング）

① 福岡県京都郡みやこ町（人口20,120人、高齢化率38.2%）

- 事前登録やSOSネットワークの仕組はあったが、実態としては実働していなかった。
- 担当部署で「事業ありきでなく、本人のために」という方針を固め、2回のアクションミーティングを開催することになった。
- 参加してもらいたい人へ出向いて、ねらいを説明。この過程で、関係者の思いやすでに動いている自主的な取り組みを発見。「こうした力を活かし合える集まりにしたい」との思いを新たにする。



介護者家族の会へ出向いて説明



○第1回アクションミーティング



5日後には本人と囲碁を楽しむつながりが



第2回ミーティングには本人も参加

パイロット調査（体制づくりを始める2自治体のアクションミーティング）

②静岡県湖西市（人口60,306人、高齢化率26.2%）

○新しいものを位置からつくるのではなく、関連する人たち・事業をつないで普段からの見守り体制を強化していく方策として、アクションミーティングをやることに。
 ○約1ヶ月の間を開けてまず3回シリーズで開催。（その後、年間通じて月1回、継続的に開催するように）
 ○ねらいが伝わるミーティングの名称を工夫。「地域でできる見守りについて考える会」に。
 ○参加者を限定せずに地域呼びかけた。35名もの参加が！口コミで参加者が拡大。

地域でできる見守りについて考える会

さとう!地域の千カラ、みんなでできること

日時：平成30年1月29日（月）
 会場：健康福祉センター（浜部町）
 時間：13:30～16:00

※この日は近隣の福祉関係者のほか、関係者も参加。興味を持って参加した方もいる。地域住民、関係者、福祉関係者、地域の関係者など、関係者も参加した。関係者も参加した。関係者も参加した。

地元施設の介護職員が住民とアイデアを出し合う

地元信金職員が自ら進行役に

ヤクルトの若者が駆けつけてくれた

住民と多様な地元企業の職員、介護職員が
 出会い、自由に話し合い、自分たちがやりたい
 テーマを考え5つのアクションチームが誕生。

みんなのアイデア

「これだけでは足りない。アイデア」は、この中ではどれですか？

テーマ「あいさつ運動」
 あいさつの輪を広げよう
 いざいざいざい。している。広がりたい。

Bグループ 2 商店との見守り・連携
 ・お店をやっている、地域に出ることが多い。
 など、地域の見守りには協力できる。関心がある。

Cグループ 3 地域の交流の場を作ろう
 ・高齢者や認知症の方のために、地域の交流の場がほしいという。作ってみるのも面白い。

Dグループ 4 見守りキーパーソン・資源などの情報を集める
 ・見守りに関する情報を取りたい。伝えたい。関係者さん。自分自身も。・・・みんなやってみよう。どんな活動があるの？

Eグループ 5 認知症の人の活躍の場を増やそう
 ・認知症の方でも、できることを探したい。活躍する場を増やしたい。自分もこれから活躍していきたい。

**Fグループ 6 高齢者・認知症の方へのちょっとした困りごと
 お助け隊をつくる**
 ・高齢者、認知症の方のために、生活の中ちょっとした困りごとを助けられたい。

提 言

①**全自治体**が明確な目標を掲げ、見守り・SOS体制づくりを計画的・継続的に推進を

②**都道府県**は、都道府県としての役割を確認し、広域体制の整備も含めて市区町村の取組の具体的推進を

③**市区町村**は、基本パッケージをもとに見直し、地域主体の持続発展的な動きや流れを推進していくことが望まれる

④行方不明の心配のあるハイリスク者と**共に**、活きた地域支援体制の構築を

⑤**全国レベル**での総合的な検討と継続的・総合的な推進

